

# 徳山ダムに沈まなかった門入地区



一度は移転した旧村民が舞い戻り、生活を続ける門入地区

## 変わらぬ自然 変わらぬ生活

揖斐川町の徳山ダム建設で廃村に追い込まれた旧徳山村に、唯一沈まなかった集落がある。村の最西端に位置した門入地区。車での進入路はない。訪れるには、ダム湖を渡る週二便の連絡船が徒歩での峠越えしかない。それでも、陸の孤島となった集落には、変わらぬ自然と景色が残る。今も古里の暮らしにこだわり、険しい山道をたどる「村人」に同行した。(岡本太)

## 峠越えて1時間半 旧村民に同行



峠越えの山道を歩いて門入地区に向かう広瀬博さん(揖斐川町)

十八日午前八時半。門入出身の広瀬博さん(63)は、旧徳山村と旧坂内村の間にそびえるホハレ峠にいた。大きなリュックにはトマトや乾めん、酒などの食材がぎっしり。軍手をはめた手には、つるはしをしっかりとぎっている。「よし、行くか」。そうつぶやくと、慣れた様子でがけのような山道をすいすい下り始めた。

広瀬さんは三年前に定年退職を迎えて以来、雪の積もる冬を除いて今も門入地区で暮らすと、つるはしを使

らし続ける。週末には本巢市の自宅へと戻るが、週のひとつを徳山村で生活。集落がそのまま残った門入地区では、同じような住民が数人いるという。ホハレ峠から村までは、歩き慣れた人でも一時間半はかかる。広瀬さんが小学生だったころ、多くの村民が大垣市や岐阜市方面へ向かうのに使ったという古道。「まさか、この時代になって使うことになるとは。今は貴重なたとえの道ですよ」。そう話していた。

「ここに来ると、ほっとする」  
広瀬さんは川で魚を釣り、畑で野菜を作り、山菜を食べて一日を過ごす。電気と電話は通っているが、それ以外は何もない。「車場が寂しく広がって

い、崩落しかけた道を修復し始めた。たどり着いた門入地区に「ダムに沈んだ村」という暗い雰囲気はなかった。西谷川の瀬音が響き、集落を囲む山々ではブナやスギの緑色が風にたわむ。道ばたではクワの実が色づき、イモリが時折顔をのぞかせる。道路には船で運んできたと思われる車が行き交う。かつて家屋があったという場所に、ぼうぼうと生い茂る草木だけが時間の流れを示していた。

便。でもこれだけ名が知られてしまった以上、村を守るにはこのままがいいのかもしれない」とも思う。  
門入地区から車で東に十分。戸入地区に△湖の最奥地がある。△湖は、ひっそりと静まり返り、水面近くの木々は白く枯れている。かつて住民が住んでいたという面影はなく、人のいない望郷広場が寂しく広がっている。